



かけがえのない者の死は、  
多くの場合、  
残された者に  
あるパワーを与えてゆく。  
浅き川も深く渡れ。



### カリブーと 星野道夫さん

アラスカに移り住んで以来、毎年  
のように北極圏にカリブー（北ア  
メリカに生息するトナカイ）の移  
動を追いかけた星野道夫さんは、  
カリブーの大群に出会うたびに「間  
にあった」という思いに満たされ  
ていったと言います。



遠い昔に会った誰かが、  
自分を懐しがっていてくれる。  
それは何と  
幸福なことだろう。

## Photographer Michio Hoshino

「道夫は本当に手のかからない子ども  
でした。ただ、当たりは柔らかい  
ですが絶対に信念を曲げない面があっ  
て、いったん口に出すと、それは決定的な  
ものだったんです」と母親の八千代さ  
んは語ります。  
高校生になった16歳の夏、「外国に  
行きたい」と言い出した道夫さんは資  
金づくりのためにあらゆるアルバイト  
に精力をそそぎ込みました。心配で外  
国行きを反対する家族の中で、理解者

## 家族が触れた素顔

ごくごく普通の子。  
でもいったん言い出したら  
テコでも引かない  
面を持っていた。

1枚の写真との出会い、  
人との出会い、自然との出会いで  
生きる方向性を蓄積

アラスカの自然を優しいまなざし  
で撮り続けた星野道夫さん。  
また一方で、子どものような  
いつぱいの好奇心で  
アラスカ先住民の老人に話を聞き、  
文章で著すという作業は、  
アラスカの人ささえ忘れかけていた  
歴史や、心の原点を呼びよせました。  
自然も人も動物もあるがままに受け入れる  
人間性あふれる心豊かな人柄は、  
どのように育まれたのでしょうか。  
ご両親、直子夫人に素顔の  
星野道夫さんを語っていただきました。



左から八千代さん、逸馬さん、直子さん。

は父親の逸馬さん一人だけ。このとき  
初めて、男同士1対1の話し合いをし  
たそうです。

「初めは、もう少し大人になってか  
ら行ったらいいと説得したんです。で  
も大人になってからの印象と高校生の  
目で見ると印象は違うんだと言われ、本  
当に真剣なのだと思いますね。やり  
たいことをやった方がいい、気持ちを  
抑えてあとで後悔しない方がいいと思  
いました」と逸馬さんは、当時の心  
境を語ります。

こうして道夫さんの初めての海外旅  
行・アメリカ一人旅は、高校2年生の  
時に実現しました。